［有明抄］（2019.4.4）

年　　組　　号（氏名）

○　次のことばについて調べよう。

ことば	読み方	意　　味
一躍		
時の人		
第一人者		
揮毫		
人生観		
逸話		
撤回		
人生訓		

○今日の有明抄にタイトルをつけてみよう。

有明抄

新元号の考案者ではないかと、一躍「時の人」になった万葉集研究の第一人者、中西進さんは揮毫（きごう）を求められると、よく「雁木の間に出入す」と書くそうだ。「令和」の典拠とされる梅花の宴を太宰府で開いた歌人、大伴旅人の人生観を表した言葉である。◆講演で江戸時代の藩政改革を例に、「正直のすすめ」を説いたところ、小学生の子どもを持つ父親から質問が出た。「正直がいいことは分かるが、政治の世界ではなかなか通用しない。子どもにどう教えればいいのか」。中西さんは「雁木―」の由来となった逸話を引いた◆古代中国の思想家、荘子が旅の途中、木こりが木を切り倒していた。「立派な木だから、いい材料になる」。しばらく行くと、親切な村人がごちそうしてくれた。「この雁はよく鳴かないので殺しました」。役に立つから切られるものと、役に立たないから殺されるもの。荘子いわく、「役に立つとか立たないとか考えず生きるのが一番いい」（『日本人の忘れもの3』）◆下関と北九州を結ぶ道路の事業化調査を巡り、国交副大臣が「（地元の）首相や副総理に忖度（そんたく）した」と述べた。発言はすぐ撤回されたが、政治の世界に珍しい「正直」な方なのか、「お役に立ちたい」とついロが滑ったのか。「われを忘れた」とご当人。人生訓を中西先生に一筆お願いしたらいかがだろう。（桑）

35　30　25　20　15　10　5